

# 五代・北宋における都城洛陽の退場

—— 中國都城史の轉換點によせて ——

久保田 和 男

はじめに

- 1、五代複都制における洛陽の地位
  - 2、後周における都城開封の建設 —— 「地中」としての開封
  - 3、宋太祖の洛陽遷都論と太宗の反對論
  - 4、北宋時代の洛陽行幸について
- おわりに —— 南宋臨安における開封と洛陽

はじめに

中國都城は、唐代までは長安・洛陽の東西を移動していた。元明清においては北京と南京を南北移動する。この理由について、妹尾達彦氏は、江南の經濟の發達と遊牧民族の根據地の東方への轉移とを擧げている。<sup>1)</sup>

問題となるのは、唐代と元明清の中間にあたる宋代である。北宋は江南の財富を北方沿邊地域の軍事據點へ供給するため國家的物流を形成する。そのための據點として都城開封が重要な意味をもった。開封は、隋代に開鑿された大運河が黄河から分流する地點の近隣に位置し華北平原の水運の據點でもあった。元代においては、大運河はさらに東に移動し、長

安・洛陽とは離れることとなる。このような都城史上の曲折のなかで、洛陽は都城としての地位を失っていった。洛陽を本格的に陪都とした最後の王朝が北宋であった。<sup>②</sup>

さて、近年、後漢から南北朝時代の洛陽に關する優れた專著が相次いで上梓され、當該時代の都城空間構造や政治文化的な意義が明らかにされている。<sup>③</sup> また、「儒教國家」論、「古典的國制」論が提唱されて久しい。それによると、後漢のはじめ白虎觀會議などによって儒教の教義が定められ、それに従った政策が推進されるようになり、「儒教國家」が成立したのだという。儒教國家への諸政策のなかで特に都城史（立地問題）に關わるのは「洛陽遷都」である。<sup>④</sup> 儒教による改革を斷行した王莽は洛陽遷都を指向したが果たせなかった。それを實現させたのが、後漢の光武帝である。（今文）『尚書』召誥の言説に従い、洛陽は周公の都、「天下の土中」と考えられていたのである。おおよそ後漢から北朝期までは、洛陽奠都を理想としていたようである。都城における天への祀り（南郊）を定期的におこなうようになったのも後漢時代からである。<sup>⑤</sup> それにともない洛陽には宮殿から南郊へむかう南北軸の大街が形成される。北魏の遷都・建設において出現した北魏洛陽城は一つの到達点といえよう。長安を京師とした隋唐においても東都洛陽の整備は大規模に實施されている。煬帝は東都洛陽を建設し、則天武后は洛陽に遷都し神都と稱し、明堂を建設している。唐の前半においては皇帝は政府ごと洛陽にしばしば行幸している。

しかし唐の中期から「漢唐」の經義は様々な角度から見直しを迫られ、儒教の變革が發生し、新儒學ともよばれる道學が起こる。小島毅氏らは、儒教史における近世の始まりとして論じている。<sup>⑦</sup> 都城の立地や空間構造は王權論を具現化したものといえよう。すなわち、王權論が大きな變化を遂げたこの時期だから、都城史における轉換点となったとも考えられる。開封に都城が移動し、洛陽にもどることがなくなる。渡邊義浩氏は、この都城の移動を「古典中國」から「近世中國」への展開の一例として言及している。<sup>⑧</sup> 都城構造においても、開封では坊制崩壊をはじめとして、千步廊の出現、外郭城壁の高層化、甕門の設置、<sup>⑨</sup> 近世的な庶民文化の展開など顯著な變化が發生している。

一方、新宮學氏は、都城北京の成立をもつて都城史上の「近世」の始まりと見る。これは冒頭に述べた、都城移動の軸線の變化による時代區分である。東洋史分野では論争のある「近世」という時代區分であるが、新宮氏は、ユーラシア規模での一體化として杉山正明氏の提唱する「モンゴル時代」・「ポストモンゴル時代」や岸本美緒氏の「地域間の緩やかな共時性」を西洋史・日本史などの「近世」に相當する時代認識の試みとして紹介し、その時期の現象として「首都（北京）の成立」の特質を浮かび上がらせる。

洛陽奠都が理想とされた時代と北京都城の始まりである「モンゴル時代」という二つの都城史の時代に挟まれた時期（二〇一―三世紀）は、どのように位置附けられるであろうか。先述したように宋代には新しい都城文化が生まれている。一方では遼・金によって現北京や内モンゴル地區などで都城建設が試みられている。それらの問題を比較史の方法によって見直し、「北京」へ接續する歴史段階として都城史の枠組みを再構成してゆく試みが必要であろう。本稿は、そのはじめの一步として、この時期において、都城洛陽がいかに都城史からフェードアウトしていったのかを検討する。

### 1、五代複都制における洛陽の地位

五代の都城は開封であり、後唐のみが唐への復古主義から洛陽を國都としたというのが教科書的な理解である。ただし、『舊五代史』『新五代史』が記述の主な対象とした九〇八年から九六〇年の間（五三年間）に、洛陽が都城（京師）であった時期もかなり長かった（一九年間）。後梁前半と、後唐時代、後晉の最初期である。しかも開封が京師となつた後梁後半、後晉・後漢・後周初期においても郊祀は洛陽で行われていた。郊壇や太廟とその神主は一貫して洛陽にあつたのである。また、當時の洛陽の城郭規模は五二里強で中國最大であつた（開封は約二〇里<sup>11</sup>。南唐の建康（江寧府）は約二五里<sup>12</sup>。これらは中國における首都性のレガリアである。したがって、五代の國都は後唐が洛陽であつたのを例外として開封に置かれたとするのは不正確である。

表 五代複都制 ※網掛は首都、斜體は陪都。

	年月	開封	洛陽	長安	魏州	太原
後梁(太祖)	907年4月～	東都開封府	西都河南府	(大安府)	(大名府)	(并州)
後梁(太祖)	909年1月～	東都開封府	西都河南府	(大安府)	(大名府)	(并州)
後梁(末帝)	913年2月～	東都開封府	西都河南府	(大安府)	(大名府)	(并州)
後唐	923年11月～	(汴州)	洛都河南府	西京京兆府	東京興唐府	北京太原府
後唐	925年3月～	(汴州)	東都河南府	西京京兆府	鄴都興唐府	北京太原府
後唐	929年6月～	(汴州)	東都河南府	西京京兆府	(魏州・魏府)	北京太原府
後晉(建國時)	936年閏11月～	(汴州)	洛京河南府	雍京京兆府	(廣晉府)	北京太原府
後晉(天福3年から)	938年10月～	東京開封府	西京河南府	(京兆府)	鄴都廣晉府	北京太原府
後漢	947年6月～	東京開封府	西京河南府	(京兆府)	鄴都大名府	北京太原府
後周(太祖)	951年1月～	東京開封府	西京河南府	(京兆府)	鄴都大名府	(北漢首都)
後周(世宗)	954年1月～	東京開封府	西京河南府	(京兆府)	(大名府)	(北漢首都)

中国の分裂時代の一つに数えられている五代ではあるが、山崎覺士氏によれば、「五代天下秩序」と稱すべき、五代なりの統合理念が存在していた。それは道制にもとづく「中國」(四至に平王)と諸國から成り立っており、諸國は封爵されている國とそうでない國(敵國)に分けられ、封爵には貢獻・上供の義務があった。中原とその中心である洛陽を支配していることが、「中國」であるというレトリックが用いられている。實際に、山崎氏の論理は後唐清泰帝時代にその時代設定をおいているので、洛陽が都城であった。

沙陀族の軍閥國家という面でも後唐の後繼國家である後晉と後漢は、洛陽に太廟・社稷・南郊といった都城における禮制(權威)の要素を残したまま開封を政府(權力)所在地とした。後唐では洛陽に集中された都城機能を分離させたのは、皇帝禁軍への軍事力の集中をはかるという權力強化の課題があったからである。そのために、四通八達の地であった開封が選ばれた。しかし開封の都城としての地位にしても必ずしも確立したわけではなく、鄴都と開封との選擇が考えられていたようだ。後晉の高祖石敬瑭は開封から魏州(鄴都)に事實上の遷都を行い、そこで崩御している。<sup>16)</sup>

天福三年(九三八)一〇月に開封に遷都した際にも、宗廟・社稷を開封に移すことが、太常寺によって提案されている。

太常奏すらくは「今東京を建つ。而れども宗廟・社稷は皆な西京に在

り。請うらくは大梁に遷し置かんことを」と。敕旨あり、「且らく舊に仍れ」と。<sup>(17)</sup>

敕旨は、それを拒み暫定的に「舊に仍る」という決定をしたという。この時期はまだ洛陽を天下の中心とみなし、そこにて國家祭祀をおこなうという「舊」制を變える決断はできなかったのである。

後晉以降も、後漢・後周（建國時）では、太廟や郊祀施設などは、依然として洛京（西京）に置かれていた。皇帝親祭は一度も行われなかったが、有司攝事により太廟・天地に對する祭儀が行われている。<sup>(18)</sup>

後晉の高祖と同年（九四二）に歿した南漢の高祖（劉龔）が、いつも「中國天子爲洛州刺史」と發言していたという記録がある。<sup>(19)</sup>この發言の記録は興味深い。これは「中原國家の君主が天子を稱しているが、實態は洛陽の節度使にすぎない」という發言である。劉龔が在位したのは九一七年からであるから、後唐と後晉についての述懐である。つまり後晉も後唐と同じく洛陽を中心とした國家であるという認識だったのであろう。

すでに拙稿で論じたことがあるが、開封にて初めて郊祀が行われるのは、後周の太祖が崩御した年である。<sup>(20)</sup>洛陽から太廟の神主がはこばれ開封の太廟に奉安され、開封の南郊に郊壇が築かれる。太祖郭威は死病に冒されていた。開封南郊で親祭したが、結局すべての儀禮をこなすことは出來ず、後繼者柴榮（開封府尹・晉王）が補佐した。<sup>(21)</sup>このように異姓の柴榮（世宗）への政權移讓が演出された。あわせて洛陽を中心とする「五代天下秩序」から脱し、開封を中心とする中央集權的な天下統一の體制の雛形が後周政權の元で生まれることになった。

戸川貴行氏は、東晉南朝では、郊祀は天下の中心の洛陽でおこなうべきであるという洛陽中心の天下觀から、建康中心の天下觀に變化し、建康において郊祀の舉行、明堂の建設が行われたという。劉宋孝武帝による儀禮整備の過程で、建康を「神京」や「王畿」とみなす新たな思想が用いられたと指摘する。<sup>(22)</sup>東晉南朝では、洛陽は北朝の領域であったため致し方ない。一方で後周では、洛陽は領内に確保されていたにも関わらず開封で郊祀する。すなわち開封を天下の中心と見なすことになったのである。では、開封を天下の中心とする禮制上の根據はどのようなものだったのだろうか。章を改め檢

討したい。

## 2、後周における都城開封の建設 —— 「地中」としての開封

『舊五代史』の一節には、世宗が天下統一について志をもっていたことが示されている。多くの官僚達は、世宗の考えを理解できなかったという。<sup>(23)</sup>これは五代の地方政權の割據と國際秩序（五代天下秩序）という状況に安住しており、それを變えることに頭が及ばなかったからであろう。一方で、世宗の天下統一の志を理解しての有效的な提案によつて重んじられたのが王朴という官僚である。<sup>(24)</sup>

かれは、後漢の乾祐中（九四八年～九五〇）進士に及第し、世宗が藩鎮に出ているとき、その記室を勤めて信頼される。世宗が開封府尹に就任すると開封府推官となり、世宗が即位するや比部郎中として國政に參劃した。まもなく知開封府事に就任する。そこで、開封の大改造が行われるのである。<sup>(25)</sup>歐陽脩が、

世宗准を征するに、朴京師に留まり、新城を廣げ、道路を通し、壯偉宏闊たらしむ。今京師の制、多く其の規爲する所なり。<sup>(26)</sup>

と評しているように、北宋の開封の制度は、王朴が定めたものだったのである。その事業については以下の四點に集約される。

- 1、外城の建設。
- 2、街路の整頓。
- 3、汴河の開通。
- 4、開封の岳臺坊を「地中」とみなす。

最後の禮制上の轉回が、前章の最後に提起した問題であるが、はじめに都城プランの整備事業における貢獻を紹介した

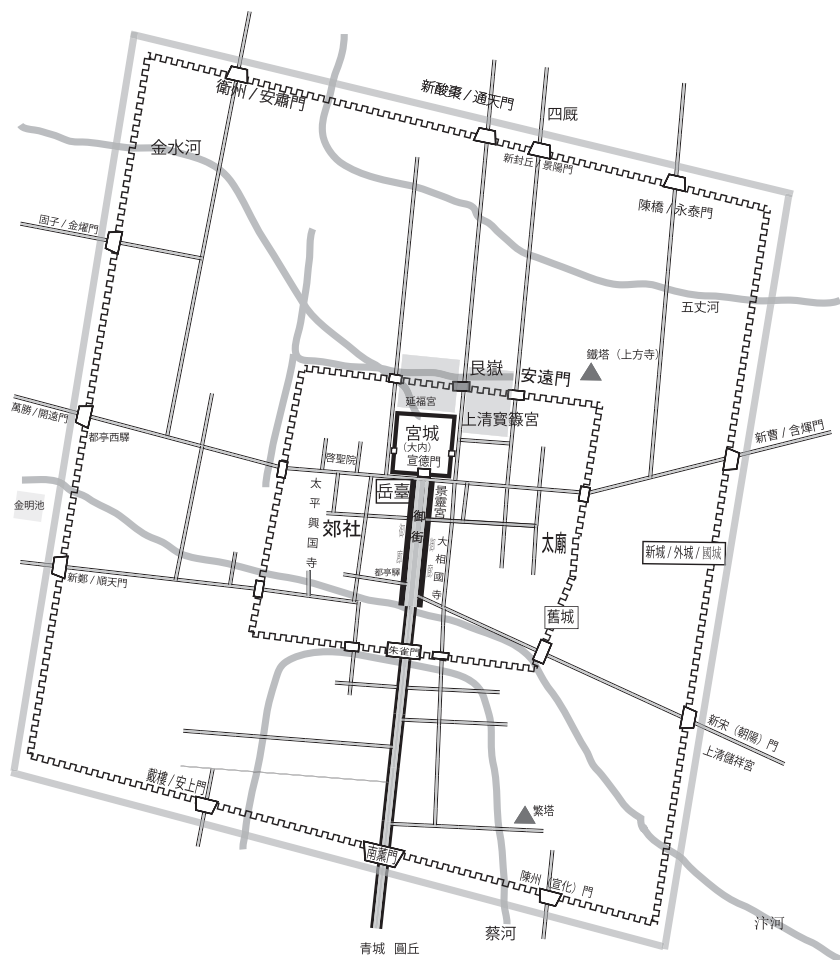


圖 1 北宋開封略圖

後に項を別に立てて論じる。

a、王朴による開封の都城建設

北宋開封は、三重の城壁で囲まれていた。内側から大内、裏城、外城である。裏城（周圍二〇里）は、舊城ともいわれるが、もともとは、隋代の汴州城のものであり、唐代宣武軍節度使の會府の城壁であった。記録では後周時代には、内部は手狭となり、特に、禁軍集中政策がとられたため、軍人とその家族が増加し、彼らの居住する軍營が外部に置かれるようになった。同時に商工業者も増加したというが、これは都城になったことにより、禁軍兵士など政府關聯の人口が増加したことと關聯しよう。そのような譯で、開封の外城（新城・羅城）が建設されることになった。顯徳二年（九五五）の四月に世宗の詔敕が出されている。<sup>(27)</sup> はじめに外城郭の建てられる場所に標識を立てておき、三年の正月、農閑期に工事を實施した。畿内及び滑・曹・鄭州の丁夫を十萬人あつめて工事を行った。その夫役を部署したのは、曹州節度使韓通であったが、建築實務は王朴が擔つた。『舊五代史』王朴傳には、

…是れに繇り登用に急なり。尋いで左散騎常侍を拜し端明殿學士に充てらる。知府故の如し。是の時初めて京城を廣ぐ。(王) 朴命を奉じ經度す。凡そ通衢とおほしありと委巷こみちの廣とらうざいと表なんぼくの間は、其の心匠に由らざるは靡し。<sup>(28)</sup>

とある。これによれば、知府として王朴は、世宗の意をうけて、京城（外城）内部の「經度」（計劃立案）をおこなった。通衢（大街）や委巷（小路）の廣（東西の長さ）表（南北の長さ）については、すべて、王朴の考えによるものであった。開封の外城部分は一人的プランナーによる計劃都市であつたといえる。先述の「標識」も王朴のプランによつたものである。

世宗は顯徳三年（九五五）を皮切りに、三年聯續して數箇月、南唐への親征をおこなっている。結果として淮南一四州を獲得する。その際に王朴は開封に残留し、庶務を取り仕切つた。まず、顯徳三年（九五五）には開封府副留守となつて



いるが、先に述べた羅城（新城・外城）の工事を行った。この羅城は周圍四八里という規模である。洛陽（周圍五二里強）や戰爭相手の南唐建康（周圍二五里強）の規模を意識して作られたのであろう。

顯徳四年の親征に際しては、權東京留守兼判開封府事<sup>(30)</sup>となつてゐる。その際、「時に街巷隘狭なるを以て、例として展拆に従わし<sup>(31)</sup>」めたという。すなわち、首都長官として都城整備に従事してゐたことが分る。翌顯徳五年四月に世宗が江南から歸還すると、「都下は肅如<sup>(32)</sup>」としていたという。

街巷の整備に關しては、顯徳三年六月に詔敕があつた。それによると、

輦轂の下、之を浩穰<sup>(33)</sup>という。萬國駿奔し、四方繁會す。此地比ごろ藩翰と爲り、近ごろ京都を建つ。人物喧闐し、閭巷隘陋たり。雨雪なれば則ち泥濘の患あり。風旱なれば則ち火燭の憂多し。炎熱に遇うごとに相い蒸し、疾沴を生じ易し。近者、都邑を開廣し、街坊を展引す。暫し勞<sup>(34)</sup>ると雖<sup>(35)</sup>然<sup>(36)</sup>ども、終には大利を獲ん。朕淮上自り、廻りて京師に及び、康衢<sup>(37)</sup>を周覽し、更に通濟を思ふ。千門萬戸、安逸の心を存する靡<sup>(38)</sup>し。盛暑隆冬、燠寒の苦を倍減せん。其れを許す。その三十歩已下二十五歩に至る者は、各おの三步を與う。其の次は差有<sup>(39)</sup>り。

京城内の街道の闊さ五十歩の者は、兩邊の戸、各おの五歩内において便を取りて樹を種え井を掘り、涼棚を修蓋すとある。世宗が、最初の淮南遠征より歸國した直後に出版されたものである。まず、「近者開廣都邑、展引街坊」とあるが、これは、顯徳三年（九六五）の一月からおこなわれた新城建設に言及したものである。したがって、戸が集中して、衛生状態がわるいと考えられているのは舊城域とみなして良からう。その部分に關しては侵街をみるとめ、都人の住みやすさを求めたわけである。王朴はこの詔敕の規定にしたがい、「街巷隘狭、例從展拓」したのであろう。前年の外城空間の整備につづき、この年は裏城の空間に手を入れたのである。

顯徳六年（九五九）三月に王朴は四五歳で急死するが、その直前に汴口に斗門をつくる工事を擔當している。大運河水

運の再開においても貢献したことがわかる。この面でも開封の都城インフラの建設者といえるのである。かれがこの工事から歸京したその日に急死したことは、後周にとっては大きな損失であった。彼自身も「朴在れば、則ち周朝在り」と嘯いていたという<sup>35</sup>。後に北宋を建國する殿前都點檢趙匡胤に對して、その行動を制御することができた高官は樞密使の王朴だけだったという故事も記録されている<sup>36</sup>。北宋太祖となった趙匡胤は、王朴がいたならば、皇帝に即位できなかつたと述懐していたという<sup>37</sup>。また、王禹偁によると、王朴の言行は、人口に膾炙したものは多かつたが、史官が書き残さなかつたという<sup>38</sup>。おそらく、急死した後周王朝の重要人物に對して忌むところがあつたのかもしれない。

b、「土中」洛陽ではなく「地中」開封を王都とする

王朴は天文曆法や樂律の復興にも貢献している。「欽天曆」と「律準」を製作し、宋代の曆學、樂律の出發點となつた<sup>39</sup>。五代では、律・曆の精密なものが作られていなかつた。世宗と王朴がそれを作成しようとしたことは、統一國家の形成に向けての國制整備の一環であらう。欽天曆作成を提案する王朴の上奏によると、

古者、圭を陽城に植つ。その洛に近きを以てなり。蓋し其の中に憐るを尙びしならん。乃ち洛の東偏に在り。開元十二年、天下に遣使して影を候る。南のかた林邑に距り、北のかた横野に距る。中は浚儀の岳臺を得。南北弦に應じ、「地之中」に居る。大周建國、汴に定都し、圭を樹え箭を置くに、岳臺の晷漏を測りて、以て中數と爲す。晷漏正しければ、則ち日の至るところ（夏至冬至、氣の應ずるところ（春分秋分）、これを得<sup>41</sup>。

とある。「地之中」（「地中」）は、『周禮』地官大司徒にしたがえば、「王國をここに建て、其の畿を制<sup>42</sup>」する地點なのである。基準となるのは、夏至の時の南中高度である。八尺の土圭によってできる影の長さの長さを測り、それが一尺五寸の地點を地中とする。これが『周禮』に見える計測方法である。開元十二年（七二四）の計測では、開封浚儀縣が「地中」にあつたというデータが得られたのである。王朴の上奏ではそれに注目し、開封が「王都」であることを主張している<sup>44</sup>。

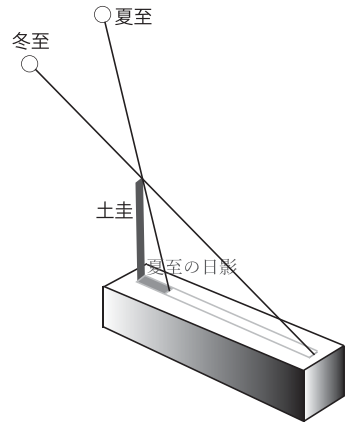


圖2 土圭圖

開元一二年の観測は、僧一行が組織した全国的な太陽南中高度の観測であり、鐵勒から交州までの測量をおこなって、正確な子午線の長さを算出することに成功している。これによって大衍曆が作られた。この観測の記録は、『舊唐書』『新唐書』や『通典』に載せられており、『資治通鑑』の開元一二年の條にも轉載されているが、肝腎の岳臺のデータ表現が微妙に異なる。これまで「地中」とされていた陽城の記録が「一尺四寸八分」というのは同じだが、岳臺は、『舊唐書』<sup>(45)</sup>では「一尺五寸微強」である。一方、『通典』『新唐書』では、「一尺五寸三分」<sup>(46)</sup>となっている。前者であると岳臺を「地中」と見なすことが可能になるが、後者は明らかに陽城が一尺五寸に近くなる。司馬光『資治通鑑考異』には、當時存在した僧一行の『開元大衍曆議』<sup>(47)</sup>の数字によって、『資治通鑑』と同じ数値表現だったことが示されており、兩説の存在を明記したうえで『開元大衍曆議』の数字によって、『資治通鑑』本文を記述したことが明記されている。王朴は、データの資源である僧一行の著作を参照して曆の問題について考えていたはずであり、そのデータは、浚儀岳臺が「地中」<sup>(48)</sup>であることを示していたのである。

欽天曆では、開封岳臺の地點を中心として標準時をきめるという<sup>(49)</sup>ことが行われている。天文現象の豫測も岳臺の標準時によって行われることになった。これは、傳統中國の國家にとって首都性の表現ともいえるのである。(従來の曆は、陽城を起點としていた。)王朴の首都インフラ整備に關わる多大な貢献をこれまで縷々述べてきたが、洛陽ではなく開封が「地中」であり、首都としてふさわしいということを理論的に主張してもいたのである。

岳臺とは、『宋史』卷七四、律曆志七、岳臺日晷の項に、

岳臺は、今の京師の岳臺坊なり。地を浚儀と曰い、近古の景を候<sup>はか</sup>るの所なり。尙書洛誥に東土と稱するは是<sup>(50)</sup>れなり。

とあり、『困學紀聞』には、

唐天文志、「測景は浚儀岳臺に在り」と。宋次道の『東京記』を按ずるに「宣徳門前、天街西第一の岳臺坊あり。今祥符縣の西九里に岳臺あり」と。『圖經』に云う「昔魏主、遙かに霍山神に事う、此の臺を築き、其の上に禱る、因りて以て名と爲す」と。<sup>(51)</sup>

とあるように、開封の岳臺坊にあたるようだ。『宋史』では、「近古」に觀測が行われたというが、唐代の觀測のことを指すのであろう。岳臺坊とは、開封舊城の坊名である。『宋東京記』に「宣徳門前天街西第一」とあるように、御街の西側で宣徳門に一番近いところである。ほぼ、都心といつてもよい。宋敏求が開封で暮らしていた神宗時代、開封の赤縣の一つである祥符縣の治所は舊城北門である安遠門の外側にあった。<sup>(52)</sup> 縣治がどれほど安遠門から離れていたのかはよく分からないが、そこからの距離が九里(約四・五キロメートルほど)だったのであろう。

先述したように、後周太祖の晩年に開封で郊祀が史上初めて行われている。それに先立ち、洛陽から太廟神主などが移動している。この際にも、王朴によって示されたような、開封Ⅱ「地中」論は意識されたとおもわれるが、それを裏附ける資料は残念ながら見つけることは出来ない。

(今文)『尚書』召誥では、歴史的に周公旦の築いた洛邑が「土中」であるという。<sup>(53)</sup> 一方、『周禮』地官大司徒では觀測による「地中」の測り方が示される。鄭玄は『周禮』の「地中」と『尚書』の「土中」を一致させる見解を打ち出した。<sup>(54)</sup> それが「中國古典國制」の洛陽奠都の理論なのである。したがって、「土中」と「地中」を切り離し、「地中」開封を王都と考えたことは、中國都城史においては大きな意味を持つものといえよう。

司馬光は、『資治通鑑』の行間に天文・曆法への關心が深いことをにじませている。<sup>(55)</sup> 「地中」の問題については、

日の黃道を行くに、毎歲差あり、地中も當に隨いて轉移すべし。故に周には洛邑にあり、漢には潁川陽城にあり。唐

には汴州浚儀にあり。<sup>56)</sup>

とあり、周に洛邑、漢では陽城、唐では浚儀と變動したことを述べており、地中が移動したと考えていたようだ。『資治通鑑』で、『舊唐書』の数字をとったのは、浚儀への地中の移動を意識したことだったと思われる。司馬光は「日行黃道、毎歲有差」と述べている。「歲差」は中國では東晉の虞喜が発見していた。極軸の首振り運動によって發生する歲差は、東西方向へのずれとして黃道には觀測される。従つて南中時間の變化となるだけなので、圭表の値には影響を與えない。地中の移動とはならない。また、「惑星歲差」や「日月歲差」とよばれる現象や、極軸の南北方向への微妙な動きとしての「章動」という震動のようなものもあるという。これらの現象は微細であり、ノーモンの觀測値にはあまり影響しないようである。

とにかくも、先に引用した、司馬光の『資治通鑑考異』によって推測されるように、王朴は『舊唐書』天文志の「一尺五寸微強」という觀測結果に依據し、開封が「地中」であるとし、都城であることを正當化した。我々はこの王朴こそ後周開封の建設者であつたことを確認したところである。次章でも繰り返し觸れるが、都城開封整備に『周禮』の理論が色濃く反映されていることに注目したい。

### 3、宋太祖の洛陽遷都論と太宗の反對論

太祖は、晩年洛陽に遷都しようとした。<sup>57)</sup>この問題については「久保田一九九七」で検討し一定の結論を得ているが、本論では「古典國制」からの展開の中で再論してみたい。

開寶九年（九七六）、實際に洛陽に太宗や百官とともに行幸し郊祀を實施している。それに先だつて、後晉以來の宿將、焦繼勳によつて洛陽宮が整備されている。彼はそのために太祖から賞賛され、「知留府事」に加えて節度使の地位を得ている。『宋史』焦繼勳傳によると、「治道」に達しており、至る所で善政を敷いたという。ただし官府の支出を多く切り詰

めたため、時人からは「吝嗇」とみなされ、評判は悪かった。<sup>(58)</sup> かが西京留守・知河南府に就任するや、以前の亂れた治安は「清肅」<sup>(59)</sup> となつたという。焦繼勳は、娘を太祖の四男德芳に嫁がせている。德芳は次代を擔うと目されていた皇子である。<sup>(60)</sup>

當時開封尹として勢力を持っていた趙匡義（後の太宗）は、この洛陽遷都はどうしても中止させねばならなかったであろう。はじめに、洛陽行幸に反対した李符は開封府の藩邸の股肱と稱せられる側近の一人である。それでも行幸が行われ、遷都が決まりそうになると自身で太祖を説得した。『長編』では省略されているが、『邵氏聞見錄』が載せる『建隆遣事』の逸文では、太祖自ら、太祖に開封における漕運の利を主張している。多くの禁兵をかかえているため都城には漕運の利が無ければならないことである。強く反対する太宗は「叩頭切諫」に及んだという。太祖はそこで洛陽遷都は、「山河の勝に據りて冗兵を去らんと欲す。周漢の故事に循いて以て天下を安せんとするなり」と述べた。<sup>(62)</sup> ここに、「周漢の故事に循う」とあることには、歴史によつて裏付けられた保守主義がにじみ出ている。南唐を征服した直後の太祖は、歴史の記憶によつて天下を安定させようとしていたのである。「冗兵を去る」とは南唐降伏によつて軍事力の整頓の機会が訪れたことを示している。天下を一統し軍縮を斷行した後漢の光武帝は洛陽奠都も行っている。さらに、『尚書』では洛陽は聖人である周公旦の建都した都城として描かれる。『尚書』は光武帝が學んでいた經典でもあった。<sup>(64)</sup> 洛陽遷都とは聖人周公旦の權威に據つた國制整備である。太祖の意圖がどこにあったかを示す言葉はこれしか無いが、後漢以來の洛陽奠都の理想を意識したものと見なすことが可能であろう。それが「周漢の故事に循う」という發言の眞意なのである。

太宗は反対した。太祖と太宗の政治には小革命に相當するような變革があつたことが以前から言われている。<sup>(65)</sup> 溝口雄三氏によると、北宋は、「一君萬民思想」ともいえるような、萬民と皇帝が等距離に對置される『周禮』の齊民思想が新法舊法を問わず共有されていたという。<sup>(66)</sup> それは、太宗に始まる獨裁君主制であり、皇帝機關説とも稱される北宋の政治文化と重なるものである。名族・外戚や藩鎮といった五代までの封建的（中間的）な權力装置は有名無實となり、機關とし

ての皇帝のもとで科擧官僚による中央集権支配がおこなわれる。外戚になる可能性がある有力者が管理する洛陽に遷都することとは、大きな隔りがある。

前章で述べたように、『周禮』地官大司徒の「地中」の計測法により開封は後周時代に王都とされた。さらに『周禮』考工記には都城プランが提示されているが、「前朝後市、左祖右社、中央宮闕、左右民廛」という原則に整理されるという。<sup>(68)</sup>開封のそれは、「中央宮闕」の點などで、隋唐の兩都よりもこの原則に近いといえる。たとえば、後周太祖末年、開封に太廟神主を持つてくるときの太常禮院の一言には、「禮」（周禮）によって「左宗廟、右社稷、在國城內」とある<sup>(69)</sup>ので、「考工記」が意識されていたことが明らかである。後周政府は『周禮』によって開封をプランニングし、開封Ⅱ「地中」であることを經學的に解決した。後周が周を國號とする國家であることに我々は改めて注目すべきであろう。ここで溝口氏の北宋の政治文化に『周禮』が深く影響しているという主張が本論の論旨の中で重要性を増すのである。

太祖からの帝位繼承を正當化するために、太宗は自身の皇帝としての「德」を示す必要があった。なにしろ、「德に在り、險に在らず」<sup>(70)</sup>と主張し太祖に遷都を止めさせたからである。かれが對峙しなければならなかったのは、現實には契丹であるが、生前の太祖や自分がパージした徳芳ら太祖の息子達でもあった。自分が彼らよりも皇帝として徳が高いことを萬民（都人）に示さねばならない。それは、北漢の併合や吳越の納地として示されるが、契丹には敗北し燕雲十六州の回復はならなかった。そこから太宗は政治方針を武斷主義から文治主義に轉じる。そして、皇帝の徳は、開封の都城空間で演出された。太宗は何度か大酺という行事をおこなった。その舞臺となつたのは、大内の正門（端門・宣徳門）まえの御街と御廊の空間であり、その空間は、私的な占有が許されない公共空間として機能していた。<sup>(71)</sup>そこは五代開封の中軸線に建てられていた官衙を、太宗時代に移轉させて擴幅した空間であつた。太宗は大酺や上元觀燈などの祝祭的な行事を、宣徳樓から見下ろし都城の繁榮と都人たちの幸福を實感したことが、史料には殘されている。君王による「與衆共樂」あるいは「與民同樂」という政治的な演出である。このような政治ショーは、北宋末の開封を描いた『東京夢華錄』にも詳述



されている。太宗から徽宗にいたるまでつづく都城空間のあり方は、「一君萬民思想」の可視化だったのである。<sup>(76)</sup>

なお、太宗は、太祖との遷都をめぐる対立を隠蔽するためにいくつかの歴史の改竄を行っている。一つはすでに、拙稿<sup>(73)</sup>で指摘したことであるが、『太祖太宗兩朝正史』では、遷都をめぐるやりとりの中から、自身が「叩頭切諫」し「在徳不在險」と強い口調で諫言したことは削除されている。また、『續資治通鑑長編』卷一七、開寶九年四月庚子に「合祭天地于南郊」とあり、洛陽に行幸し太祖が南郊に天地を祀っている郊祀の記事がある。『長編』の著者李燾はこの條に「國史改稱零祀、恐失其實。今從實錄正言之」と注している。<sup>(74)</sup>太祖は天地を洛陽の南郊で合祭したが、太宗は國史編纂に当たりそれを零祀と改竄して後世に傳えようとしたのである。洛陽郊祀の重要性を記録上減退させようとしたと見て取れる。『長編』の同じ條に、「初、雨彌月不止」とある。この時期に雨乞いをすることは考えられない。李燾はあえて雨が降り續いたことを記すことによって、太宗の歴史改竄を指摘したのである。李燾が、太祖の皇子徳芳の子孫である孝宗の時代に『續資治通鑑長編』を執筆していることに注目しなければならない。彼は、同じ巻において、太祖被弑逆説を暗示する大部の史料を『長編』の原注に附録<sup>(75)</sup>してもいるのである。

太宗が歴史記録を書き換えたのは、聖人君主が歴史を越えた存在であるという認識に立っていたからなのではないだろうか。それは、太宗が、兄太祖の「周漢」にならい洛陽に遷都するという論理に反対したこととも關聯しよう。太宗の、<sup>(77)</sup>（後唐の莊宗のように）酒色・狩獵におぼれず、夜遅くなるまで上奏に目を通して政務に精勵する獨裁君主としての皇帝像は、以後の時代に受けつがれていく。

太祖が洛陽に遷都しようとしたことは、中國都城史上、最後の本格的な洛陽遷都の試みとして注目しなければならない。太宗の遷都反対は、北宋の政治文化の方向性を決定づける重要な意義があった。それは、北宋の『周禮』的な「一君萬



民」の齊民主義の理念に結合する問題である。政治史としては、太祖・太宗の対立、そして皇子德芳の排除といった内容と關聯しており、歴史的事實の隱蔽も行われたようである。皇子德芳は夭折するが、實に南宋になってその子孫（孝宗）が臨安で帝位に即く。とすると、臨安を「洛邑」に擬制して首都性を確保したという山本健一郎氏の議論が注目されるのであるが、そのままに北宋時代の洛陽について述べておきたい。

#### 4、北宋時代の洛陽行幸について

唐朝前半の皇帝は、頻繁に洛陽に行幸している。それは、物資補給に難のある長安からの就食行であった。また武則天は洛陽を神都と改稱して遷都し、明堂建設をおこなった。ただし、唐朝後半の皇帝が、洛陽に行幸することはまれになっていった。洛陽には分司が設けられる。そこには政争に迫られる長安からのがれた官僚達の自由の空間があった。洛陽で分司としての生活を送った白居易は「狂」という處世觀を語る。それは長安の現實が救いがたく、「狂」である方が正常であるという認識から來ている。後梁の太祖初年や末帝期を除き、唐末の洛陽遷都から後晉はじめまでにかけて洛陽に皇帝と官僚機構が所在したが、天福三年（九三八）、開封に政治的な中心が移動してしまうとふたたび退休官僚の隱退生活の地となった。白居易同様、開封の武斷政治から逃れた高士が居をかまえた。特に楊凝式は「狂草」とよばれる獨特の書法によって詩作を洛陽中の壁に書き、時代への批判を表現したことで知られている。北宋でも、官僚の隱棲する空間となった。高級官僚でも開封では借家住まいのものが多かった。したがって、皇帝から屋敷を賜うことは大いなる榮譽であった。<sup>(83)</sup>一方の洛陽では引退後、甲邸を購入する士大夫も多く、『洛陽名園記』<sup>(84)</sup>で知られるような園林都市となった。<sup>(85)</sup>新法時代には舊法派の官僚が集住し、圖式的には開封の新法政府と對抗關係があったとも論じられている。司馬光・范祖禹が『資治通鑑』を編み、二程子が道學を創始したこともあり、文化都市という位置付けも試みられている。<sup>(86)</sup>本稿は北宋における洛陽の首都性の減退に關する考察である。宋朝皇帝が西京洛陽に行幸しなくなる過程に絞って論じてみよう。

前章でのべたように太祖は晩年洛陽に行幸している。しかし、洛陽遷都に反対した太宗はその治世において洛陽には行幸していない。つづく眞宗は、景德四年（一〇〇七）、汾陰の祭祀を行った際に西京の地を踏んでいる。<sup>(87)</sup> 西京の父老たちから駐蹕（遷都）を求められると、次のようなコメントを残している。

周公は大聖人なり。建都するに形勝に據り、天地の正中を得。故に數千載廢すべからず。但し今 饒運に艱<sup>かた</sup>きのみ。<sup>(88)</sup>

眞宗は、洛陽は周公の建都にかかる、「天地の正中」に所在している永遠の都であるという見解を表明している。ここには洛陽遷都の理念が再び頭をもたげていることに注目せざるをえない。眞宗は、天書をはじめとして封禪や汾陰祀などの漢唐でおこなわれた古代的な儀禮の權威にもとづき、瀟淵の盟で失墜した權威を回復しようとしていた。そのような政治文化<sup>(89)</sup>の中では、潜在的には洛陽遷都の可能性は摸索されたのかも知れない。ただし、この時点で遷都を眞宗が言い出すことはなかった。最後の一節で、その眞宗においてもやはり漕運問題が都城決定の重要な要素として意識されていたことが判明する。これは封建的な貢納ではない、中央集權的な上供によって財政的な結びつきを必要とする北宋の國家體制に開封都城體制がセットされていたことを示している。それは、封建的ではない「一君萬民」論による君主獨裁體制の成立である。その後、眞宗は大中祥符四年（一〇一一）再び洛陽に行幸するが、それ以降、宋朝皇帝が洛陽を訪れることはなくなるのである。

景祐三年（一〇三六）に、仁宗に提出された范仲淹（當時權知開封府）の上奏には、洛陽遷都・洛陽行幸についての見解が示されているので、検討してみよう。

：孔道輔、曾て西洛に遷都するを以て、臣未だ可ならずと謂<sup>おも</sup>うなり。國家太平、豈に遷都の議有るべけんや。但し西洛は帝王の宅、關河の固を負う。邊方寧<sup>やすま</sup>らざれば、則ち退守すべし。然るに彼れ空虚たること已に久しく、絶えて儲積なし。急難の時、將に何を以てか備えん。宜しく名を託するに陵<sup>たま</sup>に朝<sup>あそ</sup>ゆるの行有るを將てし、漸<sup>した</sup>に廩食

を警むべし。…陛下内には修徳を惟い、天下をして其の過を聞かざらしむ。外には亦た險を設け、四夷をして敢て生心せしめず。此れ長世の道なり。<sup>91)</sup>

まず范仲淹は、孔道輔がかつて述べた洛陽遷都論を否定する。孔道輔の上奏は管見の限り見あたらず、發表された時期やその背景などは、よく分からないが、かれは范仲淹より三才年長の士人であり、それほど、遠い過去ではないとおもわれる。范仲淹は、遷都は否定するものの、有事には洛陽に行幸して、堅固な地形（關所・河川）を利用し中原の地を防御すべきであるという。それに備えて、洛陽に糧食を蓄積せよという。皇帝は内側には徳治を實施し、外向きには、防衛據點を整備することで、「四夷」が異心を抱くことを防止できるという。ただし范仲淹のプランは宰相呂夷簡に反対され實施されなかった。<sup>92)</sup>

慶曆二年（一〇四二）に、契丹が關南一〇縣を要求してくるといふ澶淵の盟以來の危機が生じる。北宋政界では范仲淹の上述の洛陽整備論が注目された。やはり呂夷簡は反対する。洛陽の城郭を整備することは、契丹に對する抑止力にはならないと主張し、北京大名府を建都し河朔の地にて決戦する決意を契丹に示すことに決定する。<sup>93)</sup>

一方の范仲淹（當時、環慶路・涇原路路略按撫使）もこの度は「洛陽に城きずは既に及ばず」とし「速かに京城を修」するという新しい主張をおこなった。すなわち開封に住む多くの都人らを防衛する設備（堅固な城壁）がないままでは、呂夷簡の主張のように皇帝が河北に親征することはできないという批判である。その時范仲淹は陝西路で對西夏戰爭の指導に当たっていた。そこで成功した堅壁清野という防衛戦術を都城防衛にあてはめた意見具申なのである。<sup>94)</sup> 都人防衛の重視は「先憂後樂」といふ民本主義にも通じるものである。

とにかくも、對立關係にあつた呂夷簡・范仲淹の両者は、都城洛陽を整備しないことでは一致していたのである。慶曆二年、北京大名府の建都は發令されたが、歳幣の増額により宋遼關係は正常化したため、實質的な北京の都城整備は行われなかった。一方、開封への一極集中は進行し、范仲淹が主張した都人を防衛する開封外郭城の整備は神宗時代に實行さ

れることになる。この外城修築は城門に甕城を追加したりと開封の景観を一變したような大規模なものである。新法派は『周禮』を典據に議論を展開し、舊法派の反對論（『左傳』を典據）を封じ込んでいる。<sup>(95)</sup> 一方、眞宗以降、洛陽に行幸する皇帝は現れず、城郭の状況など都城に相當するような状況ではなかった。<sup>(96)</sup>（南京應天府などの状況も似たようなものであった。<sup>(97)</sup>）

ところが、徽宗時代になると再び西京行幸が企劃され注目される。<sup>(98)</sup> 政和元年（一一二一）から六年（一一二六）にかけて、西京大内の大修理が行われている。この修理を中心となつて行つたのは、「蔡攸の妻の兄、宋昇」（『宋史』地理志一、二二〇四頁）であった。史書では殊更に蔡京一族の事業である旨が強調されているのである。洛陽の人々も、久々の行幸を期待していた。政和七年（一一二七）、詞人朱敦儒は洛陽の父老から依頼され、洛陽行幸を祈願する詞を書き残している。<sup>(99)</sup>

政和年間、蔡京の主導によつて、泰山封禪が計劃された時期でもある。藤本猛氏によれば、<sup>(100)</sup> 政和六年（一一二六）、徽宗の決断により、反蔡京の立場からこの泰山封禪は中止され、いわゆる「蔡京體制」と徽宗が訣別し「皇帝親政」確立に向かう。藤本氏は言及していないが、蔡京らは泰山封禪の後にほぼ同時に、西京行幸も計劃していたことになる。行幸は実際には行われていない。封禪と同様に徽宗の主意によつて中止されたとすれば整合的である。残念ながら徽宗自身がどのように考えていたのかは明らかではない。ただし、西京大内の工事は開封の廟堂で批判に晒されていた。「古跡」を損壊したり、奢侈に過ぎる工事が行われているという聲が開封に届き問題となり、詔敕により是正が命じられている。<sup>(101)</sup> 徽宗の耳にも届いていたのである。朱勝非の記録によると、漆喰工事に用いる骨灰が不足し價格が高騰したため、人々は洛陽郊外の古墓を掘り返して得た人骨を用いて骨灰を作成していたという。<sup>(102)</sup>

徽宗時代前半、明堂の建設、四輔の設置（畿内制度）、學校制度の整備などが儒教の古典に則つて體系的に行われている。これは徽宗と蔡京が共治している時期であった。そのなかで封禪や洛陽行幸も考えられていたのではないか。藤本氏の指摘によると、蔡京が重視したのは漢唐の緯書的な禮制であった。一方、徽宗は『周禮』に基づくような三代（夏殷周）の

禮制の復活を理想と考えていた。明堂の建設を徽宗が神宗の遺志として主導したのはそれに當たる。たとえば、蔡京は、秦漢時代の傳國寶を重視するものの、徽宗は實際に使用しないという違いに對比が見られるという。このような禮制の路線対立を中心として、両者は政和年間（一一一一―一一一八）に對立するに至る、と藤本氏は論じる<sup>(10)</sup>。

我々は、ここで洛陽遷都をめぐる太祖と太宗の議論のパターンが、再浮上していることに氣附かされるのである。徽宗は紹述と稱して、『周禮』に依據した神宗の政治を模範としていた。『周禮』の計測法によって「地中」に定められ、元豐時代に都城としての規模を擴大した開封を離れて、洛陽に行幸する政治的な意義は彼自身にとつてはあまり感じられなかったのではないか。徽宗が開封を重視した理由について以下の諸點を補足しておきたい。

徽宗は治政への天譴としての星變を恐れる一方で、プラス評價として祥瑞の出現を重視した。その點は歴代北宋皇帝のなかでは眞宗に似ている。ただし眞宗が開封以外の地域へ祥瑞を求めて行幸し、泰山封禪や汾陰祀、洛陽行幸などを繰り返したのに對して、開封の城内において祥瑞をもとめた點が注目される<sup>(11)</sup>。その例はかなりの量に上るのであるが、代表的なものとして、政和二年（一一二二）、宣徳門の上に鶴が飛來したことがある。この祥瑞を自ら『瑞鶴圖』（遼寧省博物館藏）として記録している。また、開封の流通經濟の繁榮を『清明上河圖』（北京・故宮博物院藏）として張擇端に描かせている。この圖卷の制作年代については諸説あるが、板倉聖哲氏によると、徽宗時代の前半（崇寧半ばから大觀初め、一一〇四―一一〇八年頃）であるという<sup>(12)</sup>。この畫卷のモチーフは徳治の結果としての祥瑞である<sup>(13)</sup>。實際の徽宗期の開封では、高い城壁や甕城によつて守られた門が並び立っていた。それは、圖卷からは注意深く取り拂われ、そこには萬民が活躍し消費生活を謳歌している、一君萬民的な理想社會の景觀だけにトリミングされて描かれたのである<sup>(14)</sup>。つまり徽宗にとつては開封こそが聖都だったのである。

さて、徽宗は、政和年間、林靈素が主導する道教神霄派に強く傾倒してゆく。その教義の中では、徽宗は上帝の長子、神霄玉清王（長生大帝君）であり、「夷狄」の宗教である佛教が流行する中國からそれを除くために降下した天神とされた

のである。徽宗は、政和七年（一一一七）、「教主道君皇帝」として冊立されるに至る。開封大内の西に上清寶籙宮という巨大道觀を建設し、大内と渡り廊下（景龍門を通過する）で聯結した。<sup>(10)</sup> 寶籙宮の北隣に艮嶽という園林を建設し、江南から奇石・名木を運び、動植物で充實させる。鳥が一齊に飛び立ったり、雲が沸き立ったりという演出も用意されていたという。天神の降下する場所としての仕掛けである。すなわち道教の聖地を開封城内に造営し、その主人公として皇帝權力を高める戦略をとったのである。

艮嶽が作られ始めるのは政和五年（一一一五）である。完成は七年後だった。<sup>(11)</sup> ちょうどそのような大土木工事が開封で行われているなかで、蔡京らが主導する泰山封禪や洛陽行幸などの開封を離れる行幸計画は、中止されたのである。徽宗と蔡京は林靈素に對する意見の相違から對立し、蔡京は勢力を失っていった。藤本氏が述べる、徽宗が「蔡京體制」から訣別し、親政體制を確立させた政治的なプロセスの背景には、開封における祥瑞出現の演出や、道教聖地の造成などの開封中心體制の再構成という問題が横たわっていたと考えられる。

以上、眞宗を最後に、洛陽行幸は北宋では行われなくなり、開封一極集中體制が進んだことを述べてきた。最後に、徽宗時代の洛陽遷都論を一例紹介する。

宣和の初め（宣和元年は一一一九年）、王俊明という人が、開封の王氣が盡きたとし、「洛陽への遷都」を匭函を通じて上書したことが『夷堅志』に見える。<sup>(12)</sup> 王俊明は一種の豫言者である。かれの主張では、まず、天測をおこなったところ、開封に當たる分野に一星も照らす星がない。さらに宣徳門外を掘削し、六〇センチほど下の土を嗅いでみると、生氣が全くない。天の星から見放され、地脈が斷絶したから王氣が盡きた。だから遷都すべきだというのである。一應朝議に上ったものの、一笑に付され、本格的な議論とはならなかったようであるが、靖康の變の發生により注目され、王俊明は意見を求められたという。本稿の論旨からは、（洛陽）遷都論が、儒教の經學からの論理ではなくなったところが注目されよう。



本稿で縷々述べてきたように、兩漢交代期における儒教國家成立以降、洛陽に奠都することが理想とされた。しかし、五代・北宋を通じて「都城」としての洛陽の地位は失われていった。この時期、漢唐の儒學は、新儒學に主流の座を取って代わられる。鄭玄に代表される漢唐儒學では、「土中」である洛陽に奠都するのが理想の國制と考えられていた。一方、五代を通じて、政治・軍事の中心となり首都性をたかめた開封は、『周禮』大司徒にみられる土圭（フーモン）の計測法により「地中」とされ、經學上においても「王都」としてのお墨附きを得る。

開封は、北宋末年、女眞族（金）により攻略され、江南を版圖とする南宋政權は臨安を事實上の都城とすることになる。南宋政權は、臨安を正式な都城として整備することに慎重であった。行在と稱されたように公式には臨時の駐蹕地であり、あくまでも觀念上の京師は開封であった。南宋でも岳臺の觀測數値を用いて、曆を作成していたのである。ただし、不正確になってしまうので、慶元五年（一一九九）の統天曆では臨安の數値をも平行して列記するようになる。<sup>①②</sup>

臨安には開封都人の移住者が定住したこともあり、開封で形成された都市文化が移植された。孝宗・寧宗の時代になると、臨安を京師と見なす文學表現がしきりに用いられるようになった。<sup>③</sup>しかし、後周開封のように、城外に廣がる都人を防衛するための外城壁の整備・擴大は行われなかった。北宋開封では甕城が外城門に附設され、防衛が強化されたが、臨安の城門はそのような施設ではなかった。この問題は、金との和平を國是としていたため、あえて都城城郭の整備をしなかったとも考えられる。

はたして金が滅びる（一二三四年）と臨安の位置づけは變化したようだ。近年山本健一郎氏は南宋末期における臨安の首都性の定立について注目すべき論文を公刊している。簡単に紹介する。『咸淳臨安志』が、臨安で『尚書』の洛邑にみられる祭祀を整然と實施していることを強調していることに、山本氏は注目する。<sup>④</sup>臨安を洛邑に擬えることを試みている

のだという。これにより『周禮』の「地中」としての開封の首都性を否定し、臨安へ首都性を遷移しようとしたと述べる。ところで、王安石は『周禮』に基づき新法をおこなった。王安石に對する批判は、『周禮』への懷疑ともなった。南宋では、部分的な批判から疑經とするまで幅広い批判がおこった。<sup>(14)</sup>『周禮』大司徒の項の記述についても、南宋末期の黃震が『周禮』の他の部分との記述との矛盾を指摘し、周公の著作としての權威を疑っている。<sup>(15)</sup>

後周・北宋において否定された「洛邑」の首都性は臨安で「擬制」<sup>(16)</sup>として復活しようだが、現實の洛陽が都城となるわけではない。あわせて、開封も都城史から退場する。『尚書』の「土中」や『周禮』の「地中」など經書の王都思想にもとづき洛陽や開封を含む中原地區を都城とする時代（東西軸の時代）は幕を閉じたのである。生産の中心江南か政治的な據點北京を都城として選擇するようになる。この南北軸というパターンは、金中都・南宋臨安という兩都城の竝立を嚆矢とするのだろう。元朝は金中都に隣接して大都を建設する。大都は『周禮』考工記を現實化したものだという見解もあるが、建設當初は、太廟や社稷は設置されおらず、中國式の郊祀をとり入れたのもかなり後である。<sup>(17)</sup>佛教やモンゴルのな要素（祭祀や都市構造）も重視されている。<sup>(18)</sup>元・明では北京の觀測データを曆の基準とするようになったことも注目すべきことである。<sup>(19)</sup>

本稿では、北宋の都城が洛陽から離れたことを、單なる政治・財政的な問題をこえた王權論や政治思想の變革と關聯づけて考えてみた。誤解を恐れずに言えば、封建（古典中國）から君主獨裁（二君萬民）への變移である。開封の都城構造において、坊制が崩壊し、また舊城がほぼ無意味なものとなり、皇帝と都人が隣接する一君萬民的な政治空間として整理されていった背景にも同様なものがあるとおもわれる。それを庶民文化の繁榮と併せて、近世的であると稱することも可能であろう。ただし、元、明、清では、再び皇帝と庶民（都人）との間には空間的な隔たりが生じる。居住空間が城郭プランによって數重に分割されるのである。それは遼金の都城にもみられる現象であり、多民族國家ともいえる王朝の政治文化を反映した都城空間構造<sup>(20)</sup>と考えられる。北京時代への前史として、一〇—一三世紀の東アジア都城史を考える地平がこ



こで見えてきた。南北の都城史の潮流についての理解を、比較史的検討によって構造的に深めてゆきたい。

## 註

- (1) 『妹尾二〇〇一』七三頁など。
- (2) 金は最末期の興定元年(二二二七)に中京金昌府として建都している(『金史』卷二五、地理志中、中華書局一九七五、五九三頁、河南府の項)
- (3) 『鹽澤二〇一三』(佐川二〇一六)〔村元二〇一六〕など。北朝の洛陽に對峙した南朝の建康については〔戸川二〇一五〕。
- (4) 『渡邊二〇〇三』一二五頁では、「古典的國制」、〔渡邊二〇一〇〕〔渡邊二〇一五〕では「古典中國」と稱している。
- (5) 『渡邊二〇〇三』一二九頁の「後漢末・王莽期國制改革一覽」を参照。まず翼奉により、「成周の地」に遷都し、郊祀・宗廟・祭祀を古禮に照應させる事が提案される。これを皮切りに、「一覽」にあるような、國制改革が次々と實行されることになったという。
- (6) 『佐川二〇一六』八六頁には、洛陽と南北郊祀が密接に結びついていることが詳論されている。
- (7) 『小島二〇一五』三七三頁以下を参照。〔渡邊二〇一五〕一四〇頁では、「古典中國」という規範から、「理」を優先するように近世の儒學が變化したことを指摘する。これは都城論の展開においても参照すべき儒教の變化である。
- (8) 『渡邊二〇一五』一四二―三頁。
- (9) 『久保田二〇一六』などを参照。
- (10) 『新宮二〇〇五』三七八―九頁、
- (11) 『宋史』卷八五、地理志一、二二〇四頁によると宋代洛陽の城壁について、「京城周五十二里九十六步」とあり原注に「隋大業元年築。唐長壽二年増築」とあるため、唐代の規模を五代・宋も繼承していると考えられる。五代北宋における洛陽京城壁、修築工事については〔張祥雲二〇一二〕四〇頁以下を参照。
- (12) 『宋會要輯稿』方域一之一、中華書局一九五七を参照。唐五代の開封城は、北宋では舊城とよばれる城郭である。
- (13) 『景定建康志』卷二〇、今城郭、大化書局一九七八、宋元地方志叢書第二冊九八八頁を参照。
- (14) 本稿では「首都性」を首都としての機能を有する程度という意味合いで用いた。五代複都制の展開を分析するに當たり、首都としての機能が分散しており、その多寡を問題とする必要があったからである。首都との關係性についてその都市の「首都性」という概念を打ち出した共同研究が、都市史研究會編『首都性(年報都市史研究七)』(山川出版社一九九九年)であるが、その問題意識とは多少異なる

概念設定であることをお断りしておく。(『新宮二〇〇五』三七六頁も参照。

(15) 『山崎二〇一〇』三三二―三三頁。

(16) 『久保田一九九七』八一頁。

(17) 『資治通鑑』卷二八一、天福三年一〇月戊子、中華書局一九五六、九一九二頁…太常奏「今建東京。而宗廟・社稷、皆在西京。請遷置大梁。」敕旨「且仍舊。」

(18) 『舊五代史』卷七六、晉高祖紀二、天福二年七月壬申、一〇〇五頁・卷八一、晉少帝紀一、天福三年九月甲辰の注、一〇七二頁。卷八三、晉少帝紀三、開運二年四月丙子、一〇四頁。卷一〇一、漢隱帝紀上、乾祐元年二月壬午、一三二―三三頁など。

・『五代會要』卷一、雜錄、上海古籍出版社一九七八年、九頁には、「晉天福七年八月、中書門下奏、山陵禮儀使狀「高祖尊號、諡及廟號、伏准故事、將啓殯宮前、擇日命太尉率百僚奉諡冊、告天於圜丘畢、奉諡冊詠讀於靈前。」此曩朝之制、蓋以天命尊極、不可稽留。今所上高祖聖文章武明德孝皇帝尊諡寶冊、伏緣去洛京地遠、寶冊難以往來、當司詳酌、伏請祇差官往洛京、祭告南郊太廟。」とあり、鄴都で病死した高祖の尊諡を洛陽の南郊・太廟に報告する手順が議論されている。

(19) 『資治通鑑』卷二八三、天福七年(九四二)三月丁丑、九三三―三六頁。

(20) 『小島一九八九』(久保田二〇〇七)四三頁。

(21) 『舊五代史』卷一二三、周太祖紀四、廣順三年二月丙

寅・乙亥、一五〇〇頁。郊祀は、翌年一月初におこなわれ即日、顯徳と改元されるが、太祖郭威は數日後に死去し、柴榮が即位する。

(22) 『戸川二〇一五』第二章、劉宋孝武帝の禮制改革について。

(23) 『舊五代史』卷二二八、王朴傳、一六八一頁には、「初、世宗以英武自任、喜言天下事、常憤廣明(八八〇―八八一)之後、中土日蹙、值累朝多事、尙未克復。慨然有包舉天下之志。而居常計事者、多不諭其旨。唯朴神氣勁峻、性剛決有斷、凡所謀畫、動愜世宗之意、繇是急於登用。」とある。

(24) 顯徳二年夏に世宗が文學の士二十餘人に命じて策論を出させたが、王朴はそれに應じて「平邊策」を書いて評價され、左諫議大夫、知開封府事に任命されることになる(『舊五代史』卷二二八、王朴傳、一六七九―一八二頁。『新五代史』卷三二、王朴傳三四―三三頁)。その策は、南唐↓南漢↓後蜀と併合したうえで、契丹に當たるべきであるとするものであった。(『吳曉豐二〇一四』を参照。

(25) 『舊五代史』卷二二八、王朴傳、一六八一―二頁。この巻には、五代の洛陽で狂草を壁書して高名だった楊凝式の傳記も載せられている。楊凝式は五代洛陽において活躍した詩人・書家であり、唐代と宋代の橋渡し役となったと考えられている文化人である。一方は開封、一方は洛陽を代表する五代の知識人を並立しており、列傳の構成が興味深い。

- (26) 『新五代史』卷三一、王朴傳、中華書局一九七四、三四三頁・世宗征淮、朴留京師、廣新城、通道路、壯偉宏闊。今京師之制、多其所規爲。
- (27) 『五代會要』卷二六、城郭、四一七頁。
- (28) 『五代會要』卷二六、城郭、四一八頁。
- (29) 『舊五代史』卷二二八、王朴傳、一六八一頁・繇是急於登用。尋拜左散騎常侍充端明殿學士。知府如故。是時初廣京城、朴奉命經度。凡通衢委巷廣袤之間、靡不由其心匠。
- (30) 『資治通鑑』卷二九三、顯德四年二月甲戌、九五六四頁。
- (31) 『默記』卷上、中華書局一九八一、八頁。
- (32) 『舊五代史』卷二二八、王朴傳、一六八一頁。
- (33) 『五代會要』卷二六、四一四頁・輦轂之下、謂之浩穰。萬國駁奔、四方繁會。此地比爲藩翰、近建京都。人物喧闐、閭巷隘陋、雨雪則有泥濘之患。風旱則多火燭之憂。每遇炎熱相蒸、易生疾沴。近者開廣都邑、展引街坊。雖然暫勞、終獲大利。朕自淮上、廻及京師、周覽康衢、更思通濟。千門萬戶、靡存安逸之心。盛夏隆冬、倍減煖寒之苦。其京城內街道闊五十步者、許兩邊人戶、各於五步內取便種樹掘井、修蓋涼棚。其三十步已下至二十五步者、各與三步。其次有差。
- (34) 『舊五代史』卷一一九、周世宗紀六、顯德六年三月庚申、一五八〇頁。同書卷一二八、王朴傳は享年四五歳とするが、『新五代史』本傳は五四歳とする。『舊五代史』本傳では、乾祐中（九四八〜九五〇）に「擢進士」とあり、『新五代史』本傳では、「少舉進士」とあるので、四五歳の方が蓋然性がある。
- (35) 『默記』卷上、八頁。
- (36) 王禹偁『五代史闕文』、『五代史書彙編』肆編、杭州出版社二〇〇八、二四五九頁、王朴の項には、「周顯德中、朴與魏仁浦俱爲樞密使。時太祖皇帝已掌禁兵、一日、有殿直乘馬誤衝太祖道從、太祖自詣密地、訴其無禮。仁浦令宣徽院勘詰。朴謂太祖曰、太尉（時太祖檢校太尉）名位雖高、未加使相。殿直、廷臣也、與太尉比肩事主、太尉況帶軍職、不宜如此。太祖唯唯、而出。」とある。
- (37) 『默記』卷上、八頁。「王禹偁記」として引用される一節による。おそらく『建隆遺事』の闕文である。
- (38) 『五代史闕文』二四六〇頁、王朴の項には、「臣謹按、朴之行事、傳于人口者甚衆。而史氏闕書。臣聞重修太祖實錄、已于李穀傳中見朴遺事、今復補其大者。況太祖・太宗在位、每稱朴有公輔之器。朝列具聞。」とある。
- (39) 『資治通鑑』卷二九四、顯德六年正月、九五九一頁によると、世宗の諮問に應じた王朴が、樂律の調和と天下の治について論じ、樂律を正している。
- (40) 亂世によって制度が整わなかったため、後梁以降後晉までは、唐代に作られた宣明曆と崇文曆を參考にして作られた。後晉にて新曆を定めたが、數年で誤差が生じてしまう。『舊五代史』卷一四〇、曆志、一八六二―三頁を參照。
- (41) 『新五代史』卷五八、司天考、六七二頁・古者、植圭於陽城。以其近洛也。蓋尙嫌其中。乃在洛之東偏。開元十二年、遣使天下候影。南距林邑、北距橫野、中得浚儀之岳臺。

應南北弦、居地之中。大周建國、定都於汴。樹圭置箭、測岳臺晷漏、以爲中數。晷漏正、則日之所至、氣之所應、得之矣。

(42) 『周禮注疏』地官大司徒、『十三經注疏 整理本七』北京大學出版社一九九九、二九八頁。

(43) 『周禮注疏』地官大司徒、二九五頁～二九八頁には「以土圭之法、測土深、正日景、以求地中。：日至之景、尺有五寸、謂之地中、天地之所合也、四時之所交也、風雨之所會也、陰陽之所和也。然則百物阜安、乃建王國焉、制其畿、方千里而封樹之。」とある。

(44) この論點は、「李迪一九九二」により初めて指摘されたようである。「山本二〇一五」がこれに基づいて、『史記』『尚書』『周禮』における「天下の中心」についての認識の變化について論じている。本稿は兩氏の論考には言及されていない、王朴の開封建設との關係、並びに「地中」と見なされた岳臺の開封における位置について、その重要性を勘案して指摘する。「關増建 二〇〇〇」は、天文學史上における「地中」概念の變遷について論じ参考になるが、「土中」と「地中」の兩概念を區別して論じておらず注意が必要である。

(45) 『舊唐書』卷三五、天文志上、日晷、中華書局一九七五、一三〇四頁には「浚儀古臺表、夏至影長一尺五寸微強」とある。古臺は岳臺のことであろう。

(46) 『通典』卷二六、職官、太史局丞、中華書局一九八四（十通本影印）、一五七頁上には「汴州浚儀太嶽臺：夏至影

在表北尺五寸三分」とあり、『新唐書』卷三二、天文志、中晷之法、中華書局一九七五、八一三頁には、「浚儀岳臺、晷尺五寸三分」とある。

(47) 『宋史』卷二〇七、藝文志六、五二七一頁には、「僧一行『開元大衍曆議』十三卷」とある。天文曆法に關心が深かった司馬光はそれを見ていたはずである。現在は、佚している。

(48) 『資治通鑑』卷二二二、開元二二年四月壬子、六七五九頁、原注の「考異曰」以下を参照。

(49) 「李迪一九九二」

(50) 『宋史』卷七四、律曆志七、一六九四頁…岳臺日晷。岳臺者、今京師岳臺坊、地曰浚儀。近古候景之所。尚書洛誥稱東土是也。

(51) 『困學紀聞』卷九、天道、臺灣商務印書館一九七八、八〇二頁…唐天文志、測景在浚儀岳臺。按宋次道『東京記』、宣德門前天街西第一岳臺坊。今祥符縣西九里有岳臺。圖經云、昔魏主遙事霍山神、築此臺、禱於其上。因以爲名。

(52) 『汴京遺蹟志』卷一、官署、祥符縣治、中華書局一九九〇、五一頁。

(53) 『渡邊二〇一〇』八二頁によると、『白虎通』京師は、「王者の京師は必ず土中を選ぶ」と稱しており、その根拠は（今文）『尚書』の召誥篇に求められているという。

(54) 「山本二〇一五」二六頁。

(55) 『資治通鑑』卷二二二、開元二二年四月壬子、六七五九頁の胡三省のコメントを参照。

- (56) 『困學紀聞』卷四「司馬公日景圖云、日行黃道、每歲有差、地中當隨而轉移。故周在洛邑、漢在潁川陽城。唐在汴州浚儀。」朱子も『朱子語類』において今の「地中」は、岳臺であるが、漢代は陽城であったことを指摘し、その理由として、「想是天運有差、地隨天轉而差、今坐於此、但知地之不動耳。安知天運於外、而地不隨之以轉耶。天運之差、如古今昏旦中星之不同、是也。」(『朱子語類』卷八六、中華書局一九八六、二二二頁)という。
- (57) 太祖は洛陽の軍營(後唐の夾馬營)で生まれた(『宋史』卷一、太祖紀一、後唐天成二年、二頁)。そのため風土を懐かしみ、遷都する意志があったという(李燾:『續資治通鑑長編』(以下『長編』と略稱する)卷一七、開寶九年四月癸卯の條、中華書局一九九五、三六九頁)。一方、太宗は開封の軍營(後晉の護聖營)で天福四年に生まれており、洛陽には住んだことはなかった。北宋時代、生誕の地に啓聖禪院が建てられ神御が奉安された。開封大内の西隣の地である。(『事物紀原』卷七、應天寺・啓聖院の項、中華書局一九八九、三七二頁)
- (58) 『宋史』卷二六一、焦繼勳傳、九〇四三頁。
- (59) 『長編』卷一〇、開寶二年九月丁未の條、一三二一頁。
- (60) (王瑞來 一九九二)九〇頁によると、太祖は德芳を後繼者にする方針だったという。
- (61) 『邵氏聞見錄』卷七、中華書局一九八三、六六頁。
- (62) 『長編』卷一七、開寶九年四月癸卯の條、三三九頁。
- (63) 『宋文鑑』卷三二、幸西京詔(盧多遜)、中華書局一九九二、四七一頁によると、洛陽で南郊を實施する目的は、南方を征服し天下をほぼ統一したことを天に報告することとされている。
- (64) 『渡邊二〇一〇』八二頁。
- (65) 『竺沙一九八四』一四八頁―一六一頁。
- (66) 『溝口一九八七』二四七―八頁。また(與那覇二〇二三)五六頁には、宋朝以降の「中國的民主主義」の理念として「君萬民」が言及されており、それは儒教的な徳治主義であるという。また、(與那覇二〇二一)三三三頁を参照。
- (67) 『周禮注疏』卷四一、冬官考工記下、匠人營國の條、一三四五頁。
- (68) (村田一九八二)第一章 中國帝都の平面圖形、三四頁を参照。
- (69) 『舊五代史』卷一四二、禮志上、一九〇四頁には「(周廣順)三年九月、將有事於南郊、議於東京別建太廟。時太常禮院言、准洛京廟室二十五間、分爲四室、東西有夾室、四神門、每方屋一間、各三門、戟二十四、別有齋宮神廚屋宇。准禮、左宗廟、右社稷、在國城內。請下所司修奉。從之。」とある。後周開封では、宗廟・社稷が『周禮』考工記に準據して設置されたことが分る。
- (70) 『長編』卷一七、開寶九年四月癸卯の條、三三九頁。なお、「徳と險」をめぐる宋代における都城思想について、近年(山本二〇一六)が發表された。拙稿の議論にも關聯する、經學上の論點を中心とした論考であり、大變興味深いものである。が、開封を論じながら城郭構造や都城空間

に言及しないことに方法上の限界を感じた。それらが「徳と險」を物理的に宋朝が表現したものだからである。

- (71) 〔久保田二〇二六〕
- (72) 〔久保田二〇二六〕一三頁を参照。李朝の漢陽(ソウル)の都城空間について「一君萬民論」と結びつけて論じたのが、原武史氏である(原一九九六第一章)。原氏は、ソウルの王宮と民間の空間の間には一枚の牆壁しかないことに注目する。そのような都城空間構造は、李朝は君民のコミュニティを重視する政治文化にもとづくという。それは漢陽と江戸との構造比較に及んで明確となっている。ただし、残念ながら開封も同様な構造になっていることへの言及はない。朝鮮王國は宋學の影響が強く及んだことで知られている。都城の空間構造上の類似は思想面から理解することも可能であろう。
- (73) 〔久保田一九九七〕八五頁。
- (74) 『長編』卷一七、開寶九年四月庚子、三三八頁。
- (75) 『長編』卷一七、開寶九年一〇月壬子、三七八頁以下。
- (76) 〔竺沙一九八四〕第三章「獨裁君主の登場」一四三頁「實録の書きかえ」一四五頁「疑惑を生む改削」の各項を参照。
- (77) 〔竺沙一九八四〕一八一―一三頁。
- (78) 〔山本二〇一五〕五一頁。
- (79) 〔勾利軍二〇〇七〕を参照。
- (80) 〔埋田二〇〇三〕は白居易の洛陽での生活空間について發掘調査と詩の検討によって明らかにしている。
- (81) 〔中尾二〇二二〕一二四頁。
- (82) 〔石田一九八一〕
- (83) 〔梅原一九九〇〕
- (84) 李格非・『洛陽名園記』(不分卷)『叢書集成新編』新文豐出版公司一九八五、四八册六〇〇―二頁。また、〔田村一九九九〕を参照。
- (85) 北宋初期より中期までの洛陽への士大夫の定住については、〔木田一九七九〕六四頁以下を参照。また〔周寶珠二〇〇二〕は、特に園林の問題に多くの頁を割いている。
- (86) 〔木田一九七九〕〔葛兆光二〇〇〇〕を参照。
- (87) 『長編』卷六五、景德四年二月己巳、一四四四頁以下。
- (88) 『長編』卷六五、景德四年二月乙酉、一四四六頁。周公大聖人。建都據形勝、得天地正中。故數千載不可廢。但今艱於餽運耳。
- (89) 〔久保田二〇一〇〕を参照。
- (90) 『長編』卷七五、大中祥符四年三月乙亥、一七一四―一六頁
- (91) 『長編』卷一一八、景祐三年五月戊寅、二七八三頁。五月戊寅朔、范仲淹言、臣近親奉德音。以孔道輔曾言遷都西洛、臣謂未可也。國家太平、豈可有遷都之議。但西洛帝王之宅、負關河之固。邊方不寧、則可退守。然彼空虛已久、絕無儲積。急難之時、將何以備。宜託名將有朝陵之行、漸營廩食。陛下內惟修德、使天下不聞其過。外亦設險、使四夷不敢生心。此長世之道也。
- (92) 『長編』卷一一八、景祐三年五月丙戌、二七八四頁。

- (93) 〔久保田二〇一〇〕四五頁を参照。
- (94) 〔久保田二〇一〇〕四二頁・四六頁を参照。
- (95) 〔久保田二〇〇七〕第九章 神宗の外城修築をめぐる
- (96) 司馬光『溫國文正公文集』卷四七、乞罷將官狀、四部叢刊初編、四葉下によると、「西京城郭周數十里、卑薄頽缺、犬豕可踰。又灑洛二水交貫其中。每夜諸門扃鑰雖嚴、而灘流之際、人皆可以平行往來。其屬水南北巡檢下所管兵士、除出軍外、餘數不多。」とあり、城郭が崩れかかっていたり、治安状況に問題があったことが読み取れる。
- (97) たとえば、南京應天府の状況については、『石林燕語』卷二、中華書局一九八四年、一六頁に詳述されているが、大内の建設は門以外は行われず、内部は「榛莽」（草木が群がり茂る）という状況だったという。
- (98) 政和元年一月に西京の大内の修理が開始され、六年九月に完工した。これは、鞏縣陵墓への参拜につづく西京行幸が計劃されたからである。修理に當ったのは、蔡攸の義兄宋昇（京西都轉運使）であり、大土木工事であった。『宋史』卷八五、地理志一、二二〇四頁ならびに『宋史』卷三五六、宋昇傳、一一二〇八頁。『歴代宅京記』卷九、中華書局一九八四、一六三頁。
- (99) 朱敦儒『望海潮』（丁酉、西内成、郷人講作「望幸曲」）、『樵歌校注』卷上、上海古籍出版社二〇一〇、八五一六頁。丁酉は、政和七年のことである。
- (100) 〔藤本二〇一四〕第三章 政和封禪計劃の中止。
- (101) 『宋會要輯稿』方域一之三五、中華書局一九五七、「西京
- 雜錄一によると、政和三年と四年の二度にわたって、西京大内修理工事について幾つかの問題點が浮上したことが知られる。
- (102) 『宋史』卷八五、地理志一、西京、二二〇四頁。
- (103) 〔藤本二〇一四〕第三章に於て詳述されている。
- (104) 〔久保田二〇〇七〕附章「北宋の皇帝行幸について」を参照。
- (105) 〔板倉二〇二二〕二一八頁。
- (106) 〔久保田二〇二二〕を参照。
- (107) 民間で描かれた明清の『清明上河圖』は、蘇州とおもわれる江南都市をモデルとし、リアルに存在している甕城で守られた門や碑で覆われた城壁が描き込まれている。この點を對比して考えなければならない。仇英（款）『清明上河圖』（大倉集古館藏）および趙浙『清明上河圖』（林原美術館藏）を参照。
- (108) 〔久保田二〇〇七〕第一章「徽宗時代の首都空間の再編 b、神霄派の開封進出と上清寶籙宮」（二八五頁以下）を参照。
- (109) 〔久保田二〇〇七〕第一章「徽宗時代の首都空間の再編 c、艮嶽の造營」（二九二頁以下）を参照。
- (110) 『夷堅乙志』卷一四 中華書局二〇一〇、三〇一頁。蜀人王俊明、洞知未來之數、雖瞽兩目、而能說天星災祥。宣和初在京師、謂人曰、汴都王氣盡矣。君（吾）夜以盆水直氏房下望之、皆無一星照臨汴分野者。更於宣德門外密掘地二尺、試取一塊土嗅之、燥枯索莫、非復有生氣。天星不照、



地脉又絶、而爲萬乘所都、可乎。即投匭上書、乞移都洛陽。大臣交言其狂妄、有旨逐出府界、寓于鄭許間。靖康改元、頗思其言、命所在津遣、召入禁中詢之、猶理前說。

- (111) 『宋史』卷八四、律曆志十七、二〇四七頁。〔李迪一九九二〕九五頁を参照。

- (112) 〔陳瑜二〇一三〕によると、高宗の時期に作られた詞の句中、臨安は「行在」と表現されていたが、南宋中期（孝宗・寧宗頃）には、「京」「帝京」などと稱するようになったという。そこには、開封の都城文化を吸収し南北の都市文化を代表する都會として臨安が發展していたことが背景として考えられている。

- (113) 〔山本二〇一五〕四六―七頁。

- (114) 〔宇野一九四九〕第四章「宋元明に於ける論争」、第八章「周禮」の成立とその後世に及ぼせる影響」三三―三三頁と〔吾妻二〇〇九〕第二章「王安石『周官新義』の考察」を参照。

- (115) 〔宇野一九四九〕八〇―一頁、「乙、周禮内の矛盾」(二)

## 参考文献

(和文)

吾妻重二 二〇〇九 『宋代思想の研究』、關西大學出版部

新宮 學 二〇〇五 「近世中國における首都北京の成立」鈴木博之・石山修武・伊藤毅・山岸常人編『近世都市の成立』東京大學出版部

「大司徒の職掌に關する問題」を参照。『黃氏日抄』卷三〇の按文について論じられている。

- (116) 〔小島一九八九〕一三七頁によると、至元一二年(一二七五)に圓丘が築かれているが、親祀は文宗の至順元年(一二三〇)が最初である。

- (117) 〔新宮二〇〇五〕三九四頁。太廟・社稷の建設については〔陳高華一九八四〕九四頁を参照。また同書八〇頁は、大都外城のプランは佛教説話に登場する哪吒太子の身體を理念化したものであるとする(同七九―八一頁)。

- (118) 天文觀測の起點も北京に移った。〔李迪一九九二〕九五頁を参照。ただし岳臺も、參考値とされていたようだ。これは南宋の曆が臨安と岳臺を平行して曆に記載したことに似ている。

- (119) 〔久保田二〇一七〕は、比較都城史の方法を用いて遼中京の都城史における位置付けを試みた小論である。



- 石田 肇 一九八一 「楊凝式小考」『書論』第一九號
- 板倉聖哲 二〇一二 「張擇端『清明上河圖卷』（北京故宮博物院）の繪畫史的的位置」伊原弘編『清明上河圖』と徽宗の時代…そして輝きの殘照』勉誠出版
- 宇野精一 一九四九 『中國古典學の展開』北隆館、「宇野精一著作集 第二卷」明治書院一九八六、再録。
- 埋田重夫 二〇〇三 「白居易における洛陽履道里邸の意義」『中國文學研究』第二九期
- 梅原 郁 一九九〇 「宋代都市の房龕とその周邊」『布目潮瀨博士古稀記念論集・東アジアの法と社會』汲古書院
- 木田知生 一九七九 「北宋時代の洛陽と士人達——開封との對立のなかで——」『東洋史研究』第三八卷第一號
- 久保田和男 一九九七 「五代宋初の洛陽と國都問題」『東方學』第九六輯
- 久保田和男 二〇〇七 『宋代開封の研究』汲古書院
- 久保田和男 二〇一〇 「北宋慶曆時代と軍事問題——范仲淹の國防政策を中心として——」『唐代史研究』第二三號
- 久保田和男 二〇一二 「メディアとしての都城空間と清明上河圖」伊原弘編『清明上河圖』と徽宗の時代…そして輝きの殘照』勉誠出版
- 久保田和男 二〇一五 「書評」藤本猛『風流天子と「君主獨裁制」——北宋徽宗朝政治史の研究——』『東洋史研究』第七四卷第一號
- 久保田和男 二〇一六 「宋代開封における公共空間の形成」『宋代史から考える』汲古書院
- 久保田和男 二〇一七 「遼中京大定府の建設と空間構造——一世紀から二三世紀における東アジア都城史の可能性——」『東方學』第一三三輯
- 小島 毅 一九八九 「郊祀制度の變遷」『東洋文化研究所紀要』第一〇八冊
- 小島 毅 二〇一五 「思想史から見た宋代近世論」東方學會編『中國史の時代區分の現在』汲古書院
- 佐川英治 二〇一六 「中國古代都城の設計と思想」勉誠出版
- 鹽澤裕仁 二〇一三 「後漢魏晉南北朝都城境域研究」雄山閣
- 妹尾達彦 二〇〇一 「長安の都市計劃」講談社
- 田村六郎 一九四九 「洛陽名園記と金陵諸園記とから見た宋明兩時代の庭園」『造園雜誌』第一三卷第一號
- 竺沙雅章 一九八四 『獨裁君主の登場 宋の太祖と太宗』清水書院
- 陳高華 佐竹靖彦譯 一九八四 『元の大都——マルコポーロ時代の北京』中公新書

- 戸川貫行 二〇一五 『東晉南朝における傳統の創造』 汲古書院  
 中尾健一郎 二〇一二 『古都洛陽と唐宋文人』 汲古書院  
 原 武史 一九九六 『直訴と王權——朝鮮・日本の「二君萬民」思想史』 朝日新聞社  
 平田茂樹 二〇一二 『宋代政治構造研究』 汲古書院  
 藤本 猛 二〇一四 『風流天子と「君主獨裁制」——北宋徽宗朝政治史の研究』 京都大學學術出版會  
 溝口雄三 一九八七 『儒教史』 第六章 新體制の摸索と新儒學の擡頭』 山川出版社  
 村田治郎 一九八一 『中國の帝都』 綜藝舎  
 村元健一 二〇一六 『漢魏南北朝時代の都城と陵墓の研究』 汲古書院  
 毛利英介 二〇一一 『書評』 山崎覺士著『中國五代國家論』 『東洋史研究』 第七〇卷第三號  
 山崎覺士 二〇一〇 『中國五代國家論』 (思文閣出版)  
 山本健一郎 二〇一五 『咸淳臨安志』 の思想——洛邑としての臨安—— 『中國哲學研究』 第二八號  
 山本健一郎 二〇一六 『宋代における要害性重視の思想と開封批判の論理』 『中國——社會と文化』 第三十一號  
 與那覇潤 二〇一一 『中國化する日本』 文藝春秋  
 與那覇潤 二〇一三 『民主化へのふたつの道?』 『南山大學アジア太平洋研究センター報』 第八號  
 渡邊信一郎 二〇〇三 『中國古代の王權と天下秩序』 校倉書房  
 渡邊義浩 二〇一〇 『儒教と中國』 講談社選書メチエ  
 渡邊義浩 二〇一五 『古典中國』 の成立と展開』 東方學會編『中國史の時代區分の現在』 汲古書院

## (中文)

- 陳 瑜 二〇一三 『現實的選擇與理想的剪影——南宋詞人以臨安爲中心的帝都書寫』 『福建江夏學院學報』 第三卷第六期  
 葛兆光 二〇〇〇 『洛陽與汴梁 文化重心與政治重心的分離——關於一一世紀八〇年代理學歷史與思想的考察』 『歷史研究』 二〇〇〇年第五期  
 勾利軍 二〇〇七 『唐代東都分司官研究』 上海古籍出版社  
 關增建 二〇〇〇 『中國文學史上的地中概念』 『自然科學研究』 第一九號第三期  
 李 迪 一九九二 『以岳臺爲地中的經過』 山田慶兒、田中淡編『中國科學史國際會議…一九八七』 京都シンポジウム報告書』 京都大學

## 人文科學研究所

- 吳曉豐 二〇一四 「王朴《平邊策》與周世宗的統一活動」『忻州師範學院學報』、第三〇卷第三期  
 王瑞來 一九九一 「燭影斧聲」事件新解」『中國史研究』一九九一年第二期  
 張祥雲 二〇一二 『北宋西京河南府研究』河南大學出版社  
 周寶珠 二〇〇一 「北宋時期的西京洛陽」『史學月刊』二〇〇一年第四期

〔附記〕 本稿は二〇一七年度日本學術振興會科學研究費補助金（基盤研究（C））による研究成果の一部である。

of the trade activity concentrated in the colony of Sogdians who had emigrated to China, the conventional custom and activity as the Sogdian did not completely die out.

**THE DECLINE OF THE LUOYANG CAPITAL DURING  
THE FIVE DYNASTIES AND NORTHERN SONG,  
AS A TURNING POINT IN THE HISTORY OF  
CHINESE CAPITAL CITIES**

KUBOTA Kazuo

The states that succeeded one another on China's Central Plain during the Five Dynasties period maintained a system of multiple capital cities. The eastern capital was Kaifeng 開封 and the western capital was Luoyang 洛陽. This system of multiple capital cities was not just a formality; the functions of the capitals were distinct. The suburban sacrifices (*jiaosi* 郊祀) and other religious rites such as those performed at the imperial ancestral temple (*taimiao* 太廟) and for the gods of soil and grain (*sheji* 社稷) were performed at Luoyang, while Kaifeng was the centre of administrative and military affairs. The relocation of a capital to Luoyang had been regarded as an ideal since the Later Han.

According to the *Shangshu* 尚書, Luoyang was a royal capital that had been founded by Dan 旦, Duke of Zhou, and it had been identified as the "centre of the land" (*tuzhong* 土中). But during the Later Zhou the facilities for performing religious rites were moved to Kaifeng, where the suburban sacrifices were then performed. Kaifeng then came to be identified as the "centre of the earth" (*dizhong* 地中) in accordance with the measuring methods described in the *Zhouli* 周禮. By using this data, it became possible to concentrate the functions of the capital in Kaifeng.

Emperor Taizu 太祖 of the Northern Song drew up plans in his later years to move the capital to Luoyang, but Zhao Kuangyi 趙匡義 (Emperor Taizong 太宗) argued against this. Whereas Taizu wanted to revive Luoyang as a capital city on the basis of pre-Tang ideals, his younger brother Zhao Kuangyi invoked the suprahistorical principle of government by virtue to oppose this. Once he ascended the throne, Zhao Kuangyi carried out construction work and repairs in Kaifeng, and the capital's prosperity was staged in a way that made visible the idea of sharing

the ruler's enjoyment with the people (*yumin tongle* 與民同樂). Luoyang, as the western capital, became the secondary capital, but it was the secondary capital only in formal terms. Emperor Zhenzong 眞宗 made two imperial visits to Luoyang, but none of his successors travelled there. In this fashion, the imperial palace at Luoyang fell into ruin, but its urban spaces were favoured by retired officials as a place to spend one's retirement, and many gardens were created there. It also became a place where a new culture of historical and Confucian studies was produced.

During the reign of Emperor Huizong 徽宗 plans for an imperial visit were made, and the palace in Luoyang was repaired. During this time plans for performing sacrifices to heaven and earth (*fengshan* 封禪) on Mount Tai 泰山 were also progressing, and there were moves to reinstate ancient rites. It was the grand councillor Cai Jing 蔡京 who was behind these endeavours. But Huizong himself was not very keen on these plans, and this led to a confrontation between the two, as a result of which Cai Jing retired for a time from public life. Huizong adopted the position of virtuous rule based on the *Zhouli* that had been promoted by Taizong. In this manner, Luoyang receded from its former place in the history of China's capital cities. In the Southern Song, Lin'an 臨安 became the capital. During the first half of the Southern Song, Kaifeng was the ideal capital, with data about Kaifeng, which had been identified as the "centre of the earth," being used to draw up the calendar and so on. But during the second half, the idea that Lin'an was the capital grew stronger. The age when areas on the Central Plain, which included Luoyang and Kaifeng, had been made capital cities on the basis of ideas about capital cities found in Confucian canonical texts had come to an end, and there began an age in which Jiangnan 江南, the centre of production, or Beijing 北京, the political centre, would become the capital.